
光と妖花-黒の組織との戦い-

蒼衣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

光と妖花 - 黒の組織との戦い -

【Nコード】

N8933R

【作者名】

蒼衣

【あらすじ】

小学二年生になった江戸川コナンと灰原哀。ある日黒の組織のある人物がコナンに会いに来て……黒の組織との決着（戦い）が始まる。 コ哀 新志

第一話

暗い暗い闇の中にいた私を、輝いた光で導いてくれたのは貴方だった。

そう、貴方は私にとってとても大切な人で私にとっての道しるべ。

「灰原」

隣の席にいる小学生にしては整いすぎている顔立ちの男子、江戸川コナンが灰原の名前を呼んだ。

「何」

いつものように素っ気ない態度でコナンに返事を返したこの少女。

茶髪のウェーブ、こちらも小学生にしては整いすぎている顔立ち。名前は灰原哀。

今の時間は4時間目。国語の授業中で漢字の勉強をしている。

コナンにとっては小学二年生になりたての授業は退屈でしょうがない。

灰原も普通は退屈だろうが、そんな素振り一つ見せずにノートに淡々と黒板に書いてある平仮名だらけの文字を書きうつしていた。

「オメー、よく平気な顔して授業受けれるよな。こっちは退屈でしかたねえってのに。」

教科書は開いているものの、今授業でやっている所とは違うページを開いて置いてあるコナンの机を見て灰原をくすつ、と笑った。

「なかなか良いものよ。小学生の授業も馬鹿に出来ないわ。」

灰原の言葉を聞きコナンはまた退屈そうな顔をしながら机に顔を伏せた。

これもいつものこと。いつもコナンは授業も受けず机に顔を伏せて寝ている。先生方も注意はするものの、授業中寝ているにも関わらずテストではいつも満点を取るコナンに強く注意出来ていない。

コナンはもう寝てしまったのか灰原の方へ少し顔を向けて寝ている。

ほら、やっぱり授業はいいものよ。

貴方の気持ちよさそうに寝ている姿を見られるのだから。

コナンの寝顔を見ながら、灰原は思った。

窓の外を見れば無限に広がる青い空。

平和ね……ジン達は今も殺人を犯し、組織を裏切って脱走した私、シェリーを探していると言うのに。

コナンの顔を寂しそうな瞳で見る灰原。今は先生の声も、周りの生徒の声もなにも聞こえない。

いつまで、続くのかしら。この平和な時間が……

第二話

小学校の下校中。コナン、灰原、歩美、元太、光彦は歩いていた。

「寒いですねー…」

今日は特に冷える。光彦は手をさすりながら言った。

「知ってるか、光彦。寒い日は鍋がうまいんだぞっ！」

「もー、元太くんいつも食べ物の話しかないんだから……」

いつも通りの元太に歩美は呆れた。そんな三人の様子をある二人は静かに見ていた。二人で並び、そして歩いている。

「じゃーなッ！コナン、灰原ー!!」

元太の大きな声で大きく手を振りながら言った。前の三人は違う方向へ歩いていく。

「ああ」

軽く手を振り返すコナンとは別に灰原はいつものように真っ直ぐ前を向きあるいていく。

スタスタと歩いていく灰原にコナンは慌てて近づいた。

「灰原」

「何」

素っ気ない灰原の返事に内心コナンは傷付いた。

「なんでもねえ」

コナンのこの一言で二人は目的地である阿笠博士の家に付くまで一

言も会話を交わさなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8933r/>

光と妖花-黒の組織との戦い-

2011年4月2日12時55分発行